

アレックス・インケルス

佐々木 正道 (中央大学文学部教授)

A. インケルス教授 (1920-2010) は日本の社会学者が一度は手にしたであろう『社会学とは何か』(辻村明訳, 至誠堂, 1967年)の著者であり, 90歳でその生涯を閉じるまで研究への情熱は衰えることがなかった。

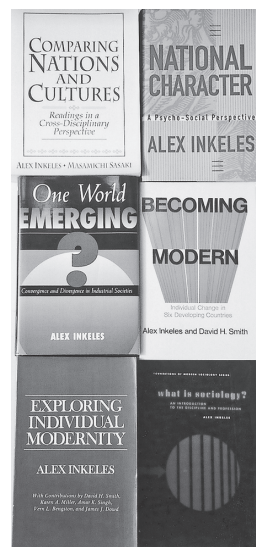
彼はまさに「調査の達人」であった。1949年にコロンビア大学でPh.D.を取得後, 国家体制の体系的分析が不可能であったソビエト連邦(当時)の調査責任者として, 西ヨーロッパとアメリカ東部に居住するソビエト連邦からの移民を対象に, 大規模な意識・実態調査を行った。それは約800名を対象とする生活史およびパーソナリティなどに関する面接調査と約1万2,500名を対象とする自記式質問調査であった。その成果は*Public Opinion in Soviet Russia* (1950年)として刊行され, *How The Soviet System Works* (共著, 1956年), そして社会調査方法の古典ともいべき*The Soviet Citizen* (共著, 1961年)が続刊された。

彼はまた近代工業化社会に関する6カ国調査(米国・英国・西ドイツ・ソビエト連邦・日本・ニュージーランド)の二次分析を行いP. ロッシと“National Comparisons of Occupational Prestige” (1956年)を*AJS*に発表し, “職業威信のランク付けは文化の相違によっても変わらない”と結論付けた。1960年代には, アルゼンチン, チリ, 東パキスタン(現在のバングラデシュ), インド, イスラエル, そしてナイジェリアの6カ国で労働者や農民らを対象(1,000人/国)に意識に関する面接調査を遂行した。発展途上国での面接調査は難しく, ナイジェリアで1人の青年に面接調査のアポイントを取った際, 面接を「捜査」と思い込んだ青年は行方不明となり村中が大騒ぎになったこと, インドでは研究仲間がラフな格好でオートバイに乗り調査に出かけたため, 研究者とは思われず面接拒否されてしまったことなど, 苦労が多かったようである。この研究は*Becoming*

Modern (共著, 1974年)として刊行され, 近代化に伴う個人の態度, 価値観, そして行動の収斂について論じられている。同書は理論的にも実証的にも傑出したものと評価され, 現在でも引用されることが多い。

1969年には*National Character*を刊行し, 従来, 人類学者, 社会学者, 精神医学者等によって質的・観念的研究として取り扱われてきたパーソナリティ類型は文化によって顕著に異なることを実証的に証明した。彼はこの研究を発展させ, 1997年には*National Character: A Psycho-Social Perspective* (『国民性論——精神社会的展望』吉野諒三訳, 出光書店, 2003年)を刊行した。ロシア人の国民性については前述の著書*How The Soviet System Works* (1956年)の中でも触れている。1980年代になり, 「日本人の国民性調査」研究を継続していた統計数理研究所の故林知己夫先生(当時所長)を中心とした調査グループ(鈴木達三・林文・筆者・吉野諒三)と日米共同の国民性研究が遂行された。

インケルス教授は, 豊富な理論的知識と実査のデータ分析とを融合的に社会学理論構築に活かしたという点で, 「理論」と「調査」が乖離しがちな社会学研究に多大な影響を与えてきた。彼はアメリカ社会学界において大規模意識・実態調査に基づく計量的国際比較研究の先駆者であり, 近代化論と比較社会学の分野に偉大な足跡を残した1人でもあった。



インケルスの著作

辻村 明

稲増 龍夫 (法政大学社会学部教授)

2010年8月20日、辻村明東大名誉教授がお亡くなりになった。

私は、東京大学社会心理学大学院～研究室助手時代の8年間(1976～84年)、ご指導を賜り、さまざまな調査にも参加させていただいた。おもなプロジェクトとしては、修士課程時代の静岡での(衆院選)投票行動の調査、博士課程時代の日韓コミュニケーションギャップの調査、そして助手時代の世界規模の対日イメージ調査などである。

ちなみに、この期間は、ちょうど東京大学文学部に社会心理学研究室が立ち上がった時期で、その責任者として校務で多忙であったのに、上記以外にも、同時進行で数件のプロジェクトに関わっておられた。これも学生時代にボート部で鍛えた体力のたまものか、疲れ知らずの、きわめて精神的な活動が際立った時期であった。

辻村先生の調査の特長は、何より、時代を先取りするビビッドなテーマ設定と、通常の学術調査の域を超えるスケールの大きさであった。

たとえば、私は参加していなかったが、1970年代後半に着手した「高速社会」に関する研究調査では、東京と大阪の「せっかち度」を測定しようということで、信号が青に変わってからどのくらいの時間で横断歩道を渡り始めるかなどの調査をおこない、明確に「大阪人はせっかちである」という結論を導きだし、当時の雑誌やテレビでかなり話題となった。その成果は『高速社会と人間』(かんき出版、1980年)として刊行された。

あるいは、ほぼ同時期に展開されていた「日韓コミュニケーションギャップの研究」は、本当に時代を先取りしていた。今でこそ、不幸な歴史的経緯を乗り越え、「韓流」ブームなどに象徴されるように日本と韓国の交流は盛んであるが、当時の韓国は民主化前の軍事独裁国家であり、その政治体制に対する反発や不信感もあって、韓国につ

いて言及すること自体がタブーであるような風潮があった。しかも、その政治体制へのマイナス感情が、そのまま国民に対するマイナス感情に結びつくという不幸な連鎖が広がっていた中での、韓国研究者との共同／相互世論調査は歴史的にも意義深いものであった。

当然のことながら、お互いにネガティブなイメージを抱えていることが実証的に確認されたが、何らかの直接的接点がある対象者層でのイメージは悪くなく、歪んだ相互イメージを改善するためにも積極的交流が必要であるという結論に達したことは現在を予見したものであった。この成果も『日本と韓国の文化摩擦』(出光出版、1982年)として刊行された。

この調査結果をさらに拡大＝敷衍したのが「世界規模の対日イメージ調査」であり、1980年代前半に世界8カ国の研究者と共同しておこなった。1億近い費用は科学研究費の特別枠で獲得し、準備期間も含め、たいへんな労力を要したが、大きな成果を得て、世間的にも注目を浴びた。その調査結果はとともここで紹介しきれないので、『世界は日本をどう見ているか』(日本評論社、1987年)を参照いただきたい。

このように、ダイナミックな問題意識と構想力、そして何より、そうした調査を実現するための行動力は、辻村先生のカリスマ力に負うところが大きく、仮説設定や調査手法にやや強引さが目立ち、一部で批判もされたが、ともかく未開拓の現代的テーマに率先して取り組んだアクティブな姿勢は、「社会調査の達人」と評して過言ではないだろう。